



皆さんが子どもの時に、おじいちゃんやおばあちゃんから「お天道様がみているよ」と、言葉をかけられたことはありませんか？私は幼少の時から、祖母からよくこの言葉を聞いたものです。お天道様は、神様、仏様とも言い換えることができるでしょう。「誰も見ていなくても、神様、仏様が見ているので、悪いことはしないように。そして、いつも良い行ないを心がけよう」ということを言っているのでしょうか。今ではこの言葉を使う人が少なくなったように思いますが、この言葉はこれからも子どもたちに言い続けていきたい言葉ではないでしょうか。

叱ることについて（2）



前号では、平尾誠二さんの「人を叱る時の四つの心得」を紹介しました。ここでもう一度「叱ること」について一緒に考えてみましょう。

叱るということは、叱る方も叱られる方も気持ちが悪くなく、なるべく叱りたくないものです。しかし、気持ちが悪くなくても、子どもがしてはいけない言動をした時には叱らなければなりません。特に危険なことをしようとした時や人の気持ちを傷つけるようなことをしようとした時には、「ダメなことはダメ」と子どもを厳しく叱らなくてはなりません。子どもは、褒められるばかりでは芯のあるたくましい子どもには育ちません。また、叱られるばかりでも自分に自信が持てない子どもになってしまいがちです。子育てには、褒めること（温かさ）と叱ること（厳しさ）の両方が必要なのです。しかし、褒める方は気持ちが良いのでいいのですが、叱ることは叱る者にとってエネルギーが必要です。叱ることは難しいのです。

良い叱り方というのは、叱られたことに納得し、「これからはやらないようにしよう」と反省する余地がある叱り方です。子どもを追い詰めるような叱り方ではいけません。できれば、後から、あの時叱られて良かったと思うような叱り方でなければなりません。でもこれがなかなか難しいことです。

人は、悪いことをしている時に気持ち良く感じる者はいないでしょう。なぜなら、悪いことをしている時には悪いということが分かっているからです。そこで、悪いことをしている時にその場で叱らないと後に何をしてもよいのだと勘違いをし、そのうちに悪いことと良いことの区別がつかなくなってしまいます。このことが一番怖いのです。

皆さんの子どもの時を思い出してください。悪いことをした時に叱ってくれた大人や先生のことをよく覚えているのではないのでしょうか。叱られたときにはいやな気持ちになっても、悪いことを見過ごした人よりも叱ってくれた人を信頼するようになるのです。

私たち大人は、子どもを自信をもって叱るようにしましょう。叱ることを躊躇せずに、見た時に間を入れずに叱ることが大切です。最初は、子どもは叱られたことでいやな思いをしますが、根底に愛情があれば、叱られたことに対して理解するようになるのです。良い親とは、上手な叱り方ができる親なのではないのでしょうか。